



朝鮮通交大紀
一

リ 5
4978
1



リ 6	明 力 5
4978	1274
1	/

朝鮮通交大紀序

新書我州朝鮮と交際通せし禮一ふのく
を死をししなり 刑部少輔公ふ始りく



大衍院公く至は又海槎録一編を後日附
たり我州通交以来書契往復有し類
をふく是は限り無起し北に今姑く之考し
を採りて編ししなり蓋我州支國の間
に在り彼をり為り所巧詐多端あり大抵
皆申叙舟李德馨り故智より取りしものなり

且この風俗趣向乃既小異にしく情偽乃
識へりさば至る多苟しく是はよく是哉
已往に鑑み微を察し然るを乃前を視り
にありて姑く試みり是を為すの
やいしく是哉失もさばものあらむ
おの書れ著しに所なり覧り人哉
よく熟く讀み深く推し覆轍を爰に存
し徒くいさゆ記録以て槩しな
くは至るさしめといり區く乃幸甚
多し乃なるこころ時

享保十年乙巳至月中浣

府臣 松浦儀右衛門允任 謹題

朝鮮通交大紀卷之一目

刑部少輔公 宗慶

一應安元戊申年始、使使高麗恭愍王、通せ

らむ事 附

彼國

宗慶公使稱して對馬

島萬戸といひの事

善勝寺公 靈鑑

一康應元己巳年高麗恭讓王慶尚道乃元帥

朴葳伐、我を伐の事

一明德三壬申年朝鮮太祖康獻王其國を朝鮮

小輩一此事

長松寺公

一應永廿六己亥年朝鮮莊憲王其將李從茂を一一我を伐一の事

圓通寺公

一此時彼國終小好を我に結ひ一主意有一乃事

一嘉吉三癸亥年 公海賊十三名を捕へし李藝に附一送し色一乃事

一此年彼國始々 公小勘合圖書を送りて歲遣

五十船特送 船伐約一且歲賜米火二百石を贈て州乃職事人乃歲遣を許し海西諸州乃使船いづも我に文引伐受り驗とに定ぬ一の事 附 此時 公小船越を津し彼國に 我歲盤をもいし三浦小分泊せ一の事 此頃莊憲王禮兵二曹伐し我に諭せし書あり一の事

妙泉寺公

一應仁二戊子年惠莊王我を伐川の諭書有し

乃事

此頃三浦倭戸刷還城 公お求免いの事

國分寺公

此頃禮曹申叔舟書い 公おいい〜我宗氏

彼こ通せ〜以來を叙せ乃事

此頃禮曹申叔舟書を〜三浦倭戸刷

還城求む乃事

一三浦倭戸禁約 并 釣魚禁約の事 附 三浦留倭

戸口乃數は事

一歳賜米大來歴の事 附 此時より〜兎名歳七

船米大各十五石は許せ事

一海東記序文乃事

龍源院公

一永正六 己巳年彼國禮賓寺正尹殷輔を使にて

三浦倭戸刷還城求む乃事 附 此比賊倭を捕

〜我を置しの次第禮曹金安國を〜書を

いせの事

一此比禮曹金安國は〜書は〜歳船受

職船乃事を論せし事

朝鮮通交大記卷之一

府臣

松浦儀右衛門允任 謹識

我州彼の國カ好通せし事 彼より書見しもの
 判官公第六代 刑部少輔諱を經茂後、宗慶
 稱、御時本朝後光嚴院御宇、廣範院義満の
 公方應安元年戊申、明乃洪武元年高麗恭愍王
 十七年、始由暹州高麗史恭愍王十七年秋七月
 對馬島萬戶遣使來獻土物、閏七月遣講究使李
 復生、于對馬島十一月對馬島萬戶宗宗慶遣使

來朝賜宗慶米一千石といふ是也

第七代 善勝寺公右馬大夫諱名頼茂後日靈鑑と稱し御時後小松院御宇同し此公方康應元年己巳明乃洪武二十二年高麗恭讓王元年春二月慶尚道の元帥朴葳としく我州を撃つ其後今乃朝鮮太祖康獻王高麗王氏を滅し其國は朝鮮と草めし明乃洪武二十五年壬申の事にして後小松院明德三年同し此公方我州善勝寺公の御時と當れり此時より朝鮮と好戦通せし終るなり

第八代 長松寺公諱貞茂讃岐守と稱し御時稱光院乃御宇勝定院義持の公方應永二十六年己亥明乃永樂十七年朝鮮莊憲王元年六月廿日其將李從茂をしく戦艦二百餘兵壹萬七千餘を領し我州與良淺海を犯し終る進むて仁位糠岳に屯せり 公三根佐賀より打立し七月朔日彼ら左軍朴宗と戦ひ大は是は敗り且海人をしく兵船を燒くしめ二千五百餘を斬り取し終る少く餘兵を

率い其國を歸り、怒爰不於る海路を隔て隣國を
撃の終は良策を講じ、其を悟り且我州西國なる
間は居る土地乃薄惡なるはをりて、其の
貿易を通し好む城法以て其を治りて、其の海
賊乃防犯を明くし、其を治りて、其の

第九代 圓通寺公諱、貞盛讚岐守と稱し、御時
たもより、其の彼の國は海賊を多く、九州壹岐の
人にして、唯り我品のみならず、其の仰り、此比
我國の賊、船明國乃界を犯し、且彼の濟州の地、小

寇し其邊將乃為り捕へ、其餘賊遁きて我州を
歸りし、ゆへ後花園院御宇慶雲院義勝乃公方
嘉吉三年癸亥、明乃正統八年、莊憲王李藝、其
し、此事、公小諭、其に賊十三名を捕へ、
李藝、附り送り、其は是、其宜し、其便宜と
して、此年始り、公小勅、合圖書を送り、歲船
五十を約し、故あり、別り遣り、其を特送し、
定數あり、其州乃職事人各歲遣を許し、及
海西諸州乃使船彼國に到る、其何事と我州乃

文引を受けく驗と為るふ約を一故公抽谷盛安
付く通交乃事を職と一小舩越梅林寺乃住鉄歡
を一多文書を掌ら一め小舩越を津と一凡を
朝鮮來往の舩いりまも爰泊せ一無又彼の國
我歲舩乃至海の舩一是を三浦小分泊と一
此時朝鮮莊憲王我州に諭せ一書二本あり
考と一左に記す

諭對馬島書

宣旨若曰天之生斯民也氣以成形理亦賦焉而
作善則降之百祥作不善則降之百殃古昔帝王
奉若天道教民稼穡樹藝五穀以養其形因其固
有之義理而開導之以淑其心若有強梗不率殺
越人于貨啓不良死者小則刑戮大則征伐堯舜
三五君人之道如是而已對馬爲島隸於慶尚道
之鷄林本是我國之境載在文籍昭然可考第以
其地甚小又在海中阻於往來民不居焉於是倭
奴之黠於其國而無所歸者咸來投集以為窟穴
或乘時竊發劫掠平民攘奪錢穀因肆賊殺孤寡

人妻子焚蕩人室廬窮凶極惡積有年紀惟我太祖康獻大王以至仁神武應天革命肇造邦家市肆不易而大業已定此雖湯武之盛何以加哉國勢大張兵力岷阜穿徹海嶽勝擲天地隆_一殷_一凡有血氣者無不懼伏于斯時也命一偏將殄殲對馬之小醜有如泰山之壓鷄卵育之搏嬰兒我太祖乃敷文德載戒武威示以恩信懷綏之道予紹大統莅國以來克承先志益申撫恤雖或間有草竊不恭之事尚念都_々熊尾之父貞茂慕義

輸誠犯而不校每接信使館馬以留仍命禮曹厚加勞慰又念其生理之艱許通興利高船慶尚道以米粟運于馬島者歲率數萬餘石庶幾養其形體以免饑餓充其良心耻為草竊並生於天地之間也予之用心蓋亦勤矣不意近者忘恩悖義自作禍胎以取覆_止然其平日投化及以興利通信而來者與今望風而降者則並皆不殺分置諸州仍給衣食以遂其生又命邊將率領兵船進圍其島以待卷土而降今其島人尚且執迷不悟予甚

憫焉島中之人計不下數千思其生理良用惻然
島中之地類皆石山未有肥衍之土稼穡樹藝無
所施功將欲乘隙竊發盜人財穀蓋其平昔所在
罪惡貫盈幽則天地山川之神然降殃禍明則良
馬大船利兵精卒水陸之備甚嚴焉往而不遭誅
戮心患哉只有捕魚採葦買賣之事乃為生理所
資而今已背恩負義自絕之矣非予先有絕之之
心失此三者不免飢餓坐待死而已於此為計
其亦難矣若能幡然悔悟卷土來降則其都之熊

尾錫之好爵願以厚祿其代官等如平道全例其
餘群小亦皆優給衣糧處之沃饒之地咸獲耕稼
之利齒於吾民一視同仁俾皆知盜賊之可耻義
理之可悅此其自新之路生理之所在也計不出
此則卷土率衆歸于本國其亦可矣若乃不歸本
國不降于我尚懷草竊之計仍留于島則當大備
兵船厚載糧餉環島而攻之歷時既久必將自斃
若又精選勇士十萬餘人四面入攻則囊中之物
進退無據其必狹稚婦女靡有孑遺而陸為島焉

之食水充魚鼈之腹也無疑矣嗚呼豈不深可哀
憐也哉此其禍福所在章々明甚非茫昧不可究
詰之事也古人有言曰禍福無不自己求者又曰
十室之邑必有忠信今對馬一島之人亦皆有降
哀兼柔之性矣豈無知時識勢通曉義理者哉兵
曹其移文馬島諭予至懷開其自新之路俾免滅
亡之禍以副予仁愛生民之志

和文

王乃歸海嶼對馬島加川我慶尚道の属島より
然もその海中に在り來往は難く海は土地乃甚く
少く地なほを以て民乃居る所やよめて倭奴の
其國より逐討を歸は所なほの是は居り所とし
海賊を業とおぢり我太祖康獻大王乃威武を以て
ふとり乃偏將の命は是は討滅せしむんと誓は
泰山乃鷄卵を壓し責育る嬰兒は執ふる如く
乃も然るも伐暫く文徳を以て是は懐けらる
より予位を継ぎよりはのる大祖大王免し
誅せしむるの意を受ぬる都々熊丸の父貞茂

義を慕ひ誠哉いそせしとあはし禮曹の命一厚く
其使戎接待せし會且嶋中石山多く稼穡を所を
を以て是の貿易戎許一又慶尚道を以て歲しふ
數万餘石を馬島小運し以てその飢饉を救ふ
しむ希く一人しもの心を存し海賊をあるの
耻多きを去る心し戎然も亦戎恩戎忘れ義ふ
背くことかくる事しし人も平日我國小降り
居おほし貿易通信の爲としり來り歸る新しふ
我小降り戎に於て是戎殺にたぬく諸州ふ分ち

置衣食を給し其生戎得せし又曾て邊將
をもて兵戎率ひ其島を圍み以てその降ふ戎
待しむ然も亦戎其心戎改む事を知はるる
罪惡を積み誅戮を招くむよりか去り魚海菜
を採り貿易し以て其衣食の計とせむよは
若くしその罪戎悔ひ速く來りて我國を降るは
都々熊丸も亦高官高祿を賜ひ代官等ハ
平道全り例乃如くし其餘も至る皆是り
衣糧戎與し以て農作の利戎得せしめむし

まのほしあきつむむ宜く一島の衆を率ひ速
く本國に歸り去りて既て我を降くはゆ本國
に歸るてかく海賊の念は懐抱因て嶋に留る
兵船はもつ島に圍み候勇士十餘万命
四面より入り攻めしむゆ一島乃衆は
婦女幼稚小いしは多くて死の禍にから
ぬも哀憐を極む乃甚く怒り非を全兵曹を
宜しきお乃意は馬嶋小諭次也

宣旨若日降哀兼彛有生所同得好善悪々人心

所同然五方之人其言語習尚雖或不同降哀兼
彛之性好善悪々之心則未始有異也今對馬倭
人等投集小島以為窟穴肆為盜賊屢被死亡無
所忌憚者非天之降才爾殊也特以小島類皆石
山土性磽薄不宜稼穡阻於海中樅遷魚蟹勢難
相繼率以海菜草根為食未免飢餓所迫喪其良
心而至此耳予甚憫焉都々熊毛之父宗貞茂為
久沉深有智慕義輸誠凡有所需靡不申請嘗請
珍島南海等島欲與其衆遷居其為子孫萬世慮

豈淺々哉予甚喜之方欲聽其所請而貞茂指世
嗚呼悲夫都々能瓦若能體予仁愛之心念父慮
後之計曉諭其衆卷土來降則當錫以大爵授以
印信頒以厚祿賜之田宅俾世享富貴之樂共代
官人等皆以次授爵領祿待以厚禮自餘群小亦
皆隨所願欲處之沐饒之地各給為農之備使獲
耕稼之利以免飢餓充其良心皆知善之當為惡
之當去一洗舊染之污變為禮義之俗共享福利
於無窮顧不偉歟然農事不可緩也若委心聽順

欲為農業則須當十二月先遣島中管事者以來
聽予指揮其農糧磁器與穀等事預為之備至時
方無欠缺若違此時則後不必強為之說所請向
來分置倭人等並令諸道官給衣糧以遂其生待
汝衆來降之日即令完聚俾無離散之憂其父兄
子弟若有欲速見之者則先來管事者將帶出來
庶為便益嗚呼敷文德以懷綏四方者自古帝王
之本心也奮武威以殄殲不率者豈所欲哉不獲
已也下令禮曹書付四諭予至懷使聞其自新之

路永遂生々之望以副予一視同仁之意

和文

王乃身備とく五方乃人言語風習各同一かゝるに
いひと母之の善を好み惡を好まざるの心を以て始
り異あることあらずはもの唯馬嶋乃倭人小嶋小
椽居り所と盜賊を為るもの其海中に在て
食乏しく魚海藻を貿易して足りぬことあり
海菜草根を食して終小飢餓と過し海を以て
これ人々の心を失ふに至るは乃と都々熊丸の父

貞茂との人と知り智深く尚よく義を慕ひ誠を
致し乞求るべきは汝あまは我と請ひしとめんと
いふ事ぬしりつるこの珠島南海等乃嶋を請ひ
一島乃衆を率ひ迂り居ると欲はぬことこれ
請ふ所と従ふことと貞茂遂に世に相傳へり
予甚と是に於て悲しむ都々熊丸若く父の
志乃しく我國と來り降るは以て大爵厚祿を
賜ひ代官か又是小祿を與へ自餘又至るは
其願ふ所と従ひ耕稼の利を得てあむ若く又

心を委す我ふ志すい農作を努めむと欲を付
宣く年乃十二月に在る嶋中事哉管さし居る者を
して来しむるは是の農器糧穀を與へ向かぬ
その耕作ははむ且請ふと云ふ倭人と分ち置
乃事既又諸道乃官よ命し是又衣食を給へしり
其衆を率ひ来り降る時を待て相聚り居る事と
得せむし彼々父兄子弟先相見へ心事を求る
事はあはさぬ来りて事哉管とる者哉しん
是哉公よいし相見たり事哉管とる者哉しん
宜く此意を馬嶋に諭さし

第十代 妙泉寺公諱ハ成職刑部少輔と称

御時後土御門院御宇慈照院義政乃公方
應仁二年戊子明乃成化四年朝鮮惠莊王十四年
我州を伐り乃教書あり考すしんかた
記に

征對馬島教書

王若曰窮兵黷武固聖賢之所戒討罪興師非帝
王之獲已昔成湯舍糞事而正有夏宣王以六月

而伐獫狁其事雖有大小之殊然其皆為討罪之舉則一而已矣對馬為島本是我國之地但以阻僻隘陋聽為倭奴所據乃懷狗盜鼠竊之計自歲庚寅始肆跳梁於邊徼度劉軍民俘虜父兄火其室屋孤兒寡婦哭望海島無歲無之志士仁人扼腕嘆息思食其肉而寢其皮蓋有年矣惟我太祖康獻大王龍飛應運威德光被撫綏相信然其凶狠貪婪之習冥然未已歲丙子攘奪東萊兵船二十餘隻殺害軍民予承大統卽位以後歲丙戌於

全羅道歲戊子於忠清道或奪漕運或燒兵船至殺萬戶其暴極矣再入濟州殺傷亦衆蓋其好人怒歎包藏姦狡之念神人所共憤也予尚包荒含垢不與之校賑其飢饉通其高賈凡厥需索無不稱副期于並生不意今又窺覘虛實潛入庇仁之浦殺掠人民幾三百餘燒焚船隻戕害將士浮于黃海以至平安擾亂吾赤子將犯上國之境其忘恩背義悖亂天常豈不甚哉以予好生之心苟有一夫失所猶恐獲戾于上下矧今倭寇肆行貪毒

賊殺群黎自連天禍尚且容忍不克往正猶為國
有人乎今當農月命將出師以正其罪蓋亦不得
已焉耳矣於戲欲掃毒山極主靈於水火斯陳利
害諭予志于臣民云云

和文

王乃と備とく兵を窮め武城りはる聖賢乃い海
志むる所といへも罪有を討し師を出入をば
帝王乃存むととほさるのこ馬島りと我國の
地ありかとも其地隔り境狭れた城りけ暫く
倭奴乃擾り居泊り城ゆる然ふと彼を盜賊乃
心を懐た歳の庚寅よりふ乃と邊界攪乱り軍
民を殺し父兄を俘りまは乃患年としてあま
ふし丙子年東萊乃兵船二十餘艘を奪ひ人を
殺し予位伐継りありあはる丙戌年全羅道ふ
於しし戊子年忠清道ふ於しし或は運漕を
掠め或は兵船焼た万戸を殺れり至ふ南ふ
濟州ふ入り殺傷をばと甚し予乃に是を許し
その飢饉を救ひ其高賈伐通し其願ひし叶

と云ふ事あり然るも南に庇仁浦入り人を
殺し掠むる者三百餘且黃海より平安といふ
地より中國乃境域犯さむと其恩我忘さ義小
背起天理を去るはあつて今農事乃時小
當く師找出し古き城討り居む事を得ざる意
宜しく古き臣民の諭はるし
此比彼國三浦の倭戸刷還の事我州よりしあり
事あり

第十一代 國分寺公諱と貞國刑部少輔と稱し、
御時後土御門院濟宇同一に公方明乃成化年中
朝鮮康靖王の時、當をり此時申叔舟 公小
呈せし書二本あり
申叔舟 公小復せし書我州朝鮮通好の次第
おもしろ嘉吉年約条乃事、成いり其書花よ
記を

答宗貞國書

承書得悉、動履佳勝、欣慰、所獻禮物、謹已啟
納、仍審示、意兼、聆使者之言、間有不相委者、不可

不復我與日本兩國交歡年代甚久自我朝開國
貴島始祖靈鑑首款於我宗貞茂繼世誠附益謹
及其末年不能和輯島人散爲海賊侵掠我邊鄙
于時我先王赫怒遣兵問罪數年之間往來不通
宗貞盛乃與島之舊老遣使來款悔禍謝罪且明
海賊率皆一岐九州之人非獨對馬島我先王以
爲罪而討之服而捨之古今通義今既服矣已往
之愆不必追咎遂命待之如舊自是歲遣使船或
多或少我先王以諸州使船皆有定額獨對馬不

曾定額慮或生弊癸亥之歲始約以五十船爲歲
額凡島之有事任者亦各有歲額圖書以爲驗其
他館待之節道路之限船之大小人之多寡皆有
成規各守信約罔敢違越夫法久必弊之而有救
有國以常事自三浦上京程有日限而處々稽留
至有踰時經歲非徒島人謀多受料押行通事亦
有謀私以至於近年南方遇災年穀不登訟途
館驛訴不能堪於是申明舊約以節其太甚以救
其弊耳非更變舊約也况其小小違法之事尚皆

優容不較。今足下之簡有曰：待遇之違舊實所未相安者也。使者所言料米雜以麩，是乃邊吏之罪。近因凶歉，稅入不多，不得不用舊儲。然雜以麩穢，豈國家之意也。今皆具由以啓我殿，下命曰：今對馬島主能通變守義事，大以誠。凡於所諭聞命，卽行無有疑貳。又不自阻，有懷悉陳。予甚嘉爾禮。曹時緩使人上京，程限五日而治我邊，吏給料不謹之罪。凡對馬島人務加優厚，具書以答。惟足下照悉竊念邦交之際，務從簡易，堅守信約。彼此無

戮然後可以久而益敦矣。若各聽往來之言，遽懷彼我，其不致後悔者幾希矣。無知之人少，不知意輒以不靖相赫。此苟不靖，則彼豈得獨安哉。是乃不思之甚也。凡今厚往薄來，歲費鉅萬而無所惜者，寧不知坐費儲廩之為可靳也哉。惟我殿下時念彼此人民一視同仁，故爾足下細念始終高度利害體聖上西濟罔間之意，撫戢姦細，禁制非違，益堅誠款，以永交好。豈不嘉哉。邇來察足下施措事合，幾宜又能彰明信篤，無有所隱，真可與有為。

者也際一會匪易敢此縷々悉陳所懷足下體而察
之益宣令譽不勝幸甚

和文

我國日本交を通を懐くと年代既久一且我々
大祖大王の時より貴嶋の始祖靈鑑始り我々
通一宗貞茂世を継ぎ益我々従ひ附りその
末年に及り嶋人を治むる事ありを以て夫を以て
散一々海賊を為し日々邊界を侵さむは
年月々先王兵遣り是は撃つてむ數年乃る

往來通せざるあり其後宗貞盛使遣りて罪を謝
且先起り海賊を以て多く九州壹岐の人にして
唯り對馬嶋乃り多きを以て明く先王遣りて故我
先王御くらく罪有る是を討し服して去るを
免はる理乃り由きに然る起りて依り是は待て
舊の如くあり是より先王歳遣船或は多く
或少一諸州使船いれども定數有る唯り對馬
船數決定めざるを以て恐る他日乃弊端たりん
とて因り癸亥年始り約し五十船遣りて

定數と一おのひ嶋中職事有人是に圖書を給一
その歳船を定め又其館待上京乃日數船乃大小
人乃多寡こを定式あり各信約成守りて敢て
違ふ事あり一夫法久一其時必弊あり弊有
時を是を救ふ是國成事の川の常へ三浦より
上京に去既小其日限有る嶋人所々滞留也
其水も歳を踰る日一其弊を救ふ乃其も今
食料を受付し其謀る乃其に押行通事又
私に家事有る爰に其は近年南方水旱小

田穀少一路次乃供給難其成訴ふは
因て以て舊約乃一其弊を救ふ乃其も今
足下乃簡く待遇乃舊約に違ふと成事の
疑ひをいふは其故成詳り小せさるる依
たり成使者の料米雜田は塵穢を以ては
いふものは邊吏乃罪乃と近比凶年貢米多か
きはるる旧米成用ひしは其を得たといふ
其も雜ゆりの塵穢を以ては其朝廷乃意あるん
や其に我ら殿下命して其は對馬嶋主

能く愛ふ通——義を守り、凡諭に所ある命のあはく
施行をばし、不事那——予甚是を嘉に各別々
使人上京乃限五日延一、備と邊吏料を給——
謹ほさるの罪を治免お、終對馬嶋人厚く是誠
待遇——且書を復——詳々、不是誠嶋主不告へ——と
ふ、何くあふ隣交乃間彼此堅く信約を守り相
疑ふ所ふく——其交久しかり、強——り——人言ふ
ふ、何く彼此相疑ふの念、誠懐らば、必後悔あり、
至るむ無智の人少——意不満足、是ハ我を怨む——
む、何く必變故不至るむと、いふを以て、凡苟も變故ニ
いふ、何くとあは、彼を唯、其安知事を得、得らんと、
あ、何と、その甚——相も、何と、凡遣り、厚く——受、
不薄く——歳——に、鉅萬を費して、惜ほさ、
是殿下仁念乃及、何に所乃、足下宜く詳ふに
始終、誠お、い利害を計り、能く殿下乃、意誠體——
以て、奸民を治め、益誠信を、い——好みを、永く、
近比、足下乃、為り、所を察、を、信篤ふ——て、
所、何——い、い、語は、海、何の人あり、い、何く、所、懐、

陳五法乃

申叔舟三浦留倭乃事を以て 公小呈也書

あり尤記以

送宗貞國書

春、和欣、想清、適開、慰開、慰本、曹今、承王旨、若曰、我先王以對馬島人寄居三浦者日增在彼則逃賊在此則隱迹投間騁詐為益於邊乃命禮曹移書島王令遵舊約點刷以聞先島主即遣人來刑罪人方欲點刷而遭疾未果今島主新立必能繼先志以敦誠款爾禮曹其馳書以諭島主本曹竊考

厥初貴島之人來市我邊因而寄居三浦其數甚少久而漸多歲甲寅我莊憲大王視微慮遠命悉刷還當時島主悉刷還之而請姑留六十名厥後因仍以至至于今容姦積多勢必生釁如是而猶為姑息之計實非永好之道今我殿下新臨大東方整疆場綏迓及遠足下亦初政於島方修款誠宜躡聖上敦眷之意丕繼先志悉刷還本一如舊約其有不得已仍留者錄名以聞以除積弊以篤新

款以永隣好彼此幸甚時賜物件具如別録領納
且一眞珍重

和文

本曹王旨を承く對馬島の人我ら三浦よりのみ
居る者日城逐ひ其數城増は彼も不在は其の役を
逃さぬまきく在るは邊害城為により我々先王
禮曹よ命一書を嶋主に送り是城にて旧約乃
さしつゝなすむ先島主由きた人城して來りその
罪人を刑一數外の人城ありぬあむとてその病
にさしつゝあき城果さる今嶋主新小立の必能く

先志を継む宜く書をいし是を島主に諭せし
本曹よ命一書是城考ふ所小初め貴島の人我邊小
來り貿易しつゝ三浦より留はれ其數甚く
少く久くして漸々多起ふいよ甲寅年我莊憲
大王かりて命一嶋主城一是城ありてめ
歸さしむあり時去るは六十名城留るは其城
請を多りしに今人々これに記乃多起りしは
是城ありてむふしあむ必齎端城りしは

實に永好乃道、非に我々殿下新小園より臨み
足下向く初めて州勢城承く宜くよく先志を継ぎ
舊約のしく是城ありとあるの如き事なくして
留るりの其名を録して啓聞して以て他日乃
弊なきにめば彼此幸甚

三浦倭戸乃禁約釣魚の禁約海東記に見へり
考一と一と尤ふ記に

三浦禁約

對馬島之人初請來寓三浦互市釣魚其居止及

通行皆有定度不得違越事畢則還因緣留居漸
至繁滋世宗命移書島主宗貞盛令皆刷還貞盛
答書曰當並刷還其中最久者六十名姑請仍留
乃許之其後因仍不還世祖又命移書島主宗盛
職令刷還成職尋死又移書今島主宗貞國貞國
之言曰以我從小二殿在博多兩年未得奉行然
當不食言○丙戌年巡察使朴元亨因饋餉密計
人口乃而浦戸三百男女一千二百餘口金山浦
戸一百一十男女三百三十餘口塩浦戸三十六

男女一百二十餘口○舊約高賤人潛接恒居人
戸者因縁結幕者貿易事畢後故留者並痛禁

和文

初め對馬嶋の人來て我國三浦に居る其貿易
約魚を求ふもの居所來往いひまも定所あり意に
任一定式に違ふ事找ゆるは貿易釣魚の事
終まれば歸り去る其後いつとれく留居し漸々
人衆ふいつら世宗書を嶋主宗貞盛に致し尽く
何れも歸さむ貞盛乃答書にいとく尽く去るは

歸に歸し但其中最も年久し記者六十名志を
留り居るし其請ふと其後終ふ仍り留りて歸は
世祖書找島主宗成職に致し是找あはれし
成職死にゆつては書找今乃嶋主宗貞國に致し
此事找告しむ貞國のいとし我今小二殿に志を
博多に居るし兩年たを以て未命のしとなは
あはれし然も終ふ宜くおしとのしは
や云々丙戌年巡察使朴元亨三浦の人を食
料找與ふふりし密に其人數を計るあり

乃而浦倭戸三百男女一千二百餘口釜山浦倭戸
一百一十男女三百三十餘口塩浦倭戸三十六男女
一百二十餘口又旧約より高販人潜ふ三浦の留倭と
相接を海の事及び小屋造り一終る居々の事
及び貿易事終りの後留り居々の事皆嚴しく
是禁に

釣魚禁約

對馬島人釣魚者受島主三著圖書文引到知世
浦納文引萬戸改給文引孤草島定處外勿許橫
行釣魚畢還到知世浦還萬戸文引納稅魚萬戸
於島主文引回批著印還付為驗若無文引者稱
不勝風浪潛持兵器橫行邊島者以賊論

和文

對馬嶋人釣魚乃為として來る者島主三所
圖書を押しりの文引を受來り知世浦に至り其
文引改万戸に納む萬戸更に是れ文引改免
給に孤草嶋定所の外意として任し横行を事
を許さるその釣魚の支終る時再び知世浦に至り

文引を萬戸に還し魚稅納む萬戸嶋主乃文
引におしき印を押し驗とししり歸らしむ
若文引を起し或る風を俟し抵し潛し兵器
持し邊嶋小横行し傍者いづる海賊をもり
是を論じ

歳条船及い見名送使歳賜米豆乃事海東記
見ゆ考ししに左記に

島主宗貞國癸亥宗貞盛為島主時約歳遣五十
船如有不得已報告事数外遣船則謂之特送歳
賜米豆并二百石

宗貞秀貞國長子與貞國同居丁亥遣使來朝書
稱對馬州平朝臣貞秀約歳遣七船歳賜米豆并
十五石貞秀襲貞國前任故傳船賜米皆仍其舊

和文

嶋主宗貞國乃祖宗貞盛嶋主の時癸亥年
より始り歳遣五十船約し若るむしと
事を告報し數外の船を遣る是特送也
彌に歳賜米豆各二百石宗貞秀貞國

長子なり貞國と同く居る丁亥年使遣して
來朝を以て其書に對馬州平朝臣貞秀と稱
せり歲遣七船歲賜米豆各十五石伐約に其
後貞秀貞國の職を襲ぐも其歲船を遣し
歲米を賜ふ事島主の例なり

海東記に載せし所我州人受職船の事上京
路程及び路宴乃事宴饗例式の事五日收の事
いひまも略し記さし

明乃成化七年本朝後土御門院御宇文明三年

辛卯朝鮮申叔舟海東諸國記撰に其序文
のいふ所其大略をとり是伐尤も録す

海東諸國記序節文

夫文隣聘問撫接殊俗必知其情然後可以盡其
禮盡其禮然後可以盡其心矣我主上殿下命臣
叔舟撰海東諸國朝聘往來之舊館穀禮接之例
以來臣受命祇秉謹舊籍參之見聞圖其地勢
略叙世係源委風土所尚以至我應接節目裒輯
為書以進臣叔舟又典禮官且嘗渡海躬涉其地

島居星散風俗殊異今為是書終不能得其要領
然因是知其梗槩庶幾可以探其情酌其禮而收
其心矣竊觀國於東海之中者非一而日本最久
且大其地始於黑龍江之北至于我濟州之南與
琉球相接其勢甚長厥初處々保聚各自為國周
平王四十八年其始祖狝野起兵誅討始置州郡
大臣各占分治猶中國之封建不甚統屬習性強
悍精於創製習於舟楫與我隔海相望撫之得其
道則朝聘以禮失其道則叛肆剽竊前朝之李國
亂政秦撫之失道遂為邊患沿海數千里之地廢
為榛莽臣嘗聞待夷狄之道不在乎外攘而在乎
內修不在邊禦而在乎朝廷不在乎兵革而在乎
紀綱今我國家來則撫之優其餼廩厚其禮意彼
乃狃於尋常欺誑真偽處々蓄留動經時月變詐
百端溪壑之欲無窮少拂其意則便發忿言地絕
海隔不可究其端倪審其情偽其待之也宜按先
王舊例以鎮之而其情勢各有重輕亦不得不為
之厚薄也然此瑣々節目時有司之事耳聖上念

古人之所戒鑑歷代之所失先修之於已以及朝廷以及四方以及外域則其於終致配天之極功也無難矣何況於瑣々節目乎

和文

夫鄰國之交異俗故治心乃道宜先其情意を知りその礼を以て古往の接し其歡心を得し然して後以て我の服を以てむる今主上臣の命し海東諸國朝聘信使來往乃事及ひ館侍乃事例を書に著さしむ臣久しく禮曹に

職ありゆへ曾て其國に至り因り今此書を撰其大略故著し東海乃中に國を以て日本を久しく且大なりその地黑龍江の北より始り我の濟州の南より琉球と相近くその勢い甚長し周平王四十八年其始祖狹野兵を起し始り州郡を定免大臣故して分ち治めしむ大方中國乃封建此を以て其性強悍よりて劍槊を猜し舟楫の慣りより是故を以て朝聘し其のくされも賊盜をなはし高麗乃末是故を以て

い〜以外域に及、同はたかのお流を接待する事
類し小至りてはおろつゝ是を職とふ者有り以て
聖慮を煩もはる小至るむや

第十三代 龍源院公諱ハ義盛讚岐守と稱し、

御時後栢原院御宇惠林院義植の公方永正
六年 己巳明乃正徳四年朝鮮恭僖王禮賓寺
正尹啓輔を〜我州に來り金安國を〜
書を送り三浦数外の倭戸を改め且奸人城
懲りの事お〜いかに捕ふる所の賊倭あるは
罪典小置た〜事状告〜む其書在よ記に

答對馬島主書

海途阻、隔瞻、覲無由、難堪、勤企、就中、貴島、世輸、忠
款、恪事、無二、國家、亦用、嘉之、接遇、之典、無所、不至
交、通、脩好、久而、不渝、我國、收綏、遠之、效、貴島、獲、畏
天之、福、可謂、西得、其道、矣、頃年、以來、奸、細、之徒、漸
肆、兇、獷、不顧、國家、卯、育之恩、不畏、足下、檢、戢、之威、
向、間、作、耗、比、比、有之、在、丙寅、九月、倭、船、一艘、犯、全
羅、道、界、因、濟、州、人、夜、泊、楸、子、島、掩、襲、劫、掠、至、殺、朝

臣柳軒金良輔此非貴島人則必居三浦者也三浦之倭來投我土長子若孫安業而居殆將百年其便漁釣通互市以資衣食者無非我祖宗綏懷之恩而蠢爾無知之輩忘恩背德輒懷奸軌撫之愈勤稔惡愈甚自甲子年後連辱邊將又擅越關限焚蕩民家肆兇無忌至此其甚國家豈不知所以處之但以王者包荒之量姑不與較以開草面自新之路然只此而已則彼頑悍之徒無所懲創愈懷奸圖以干王法終至於不可救則誠為憫惻且以在我祖宗朝許處三浦者只約六十戶其出入行住皆有界限法程年代浸久漸失本約繁衍種族因循苟留生齒既衆奸類之蘖芽其間勢所必至在我既不得綏懷之益在彼亦非自全之道不得不申舉舊約刷還餘戶使彼我兩全故前者併將此意通書貴島使足下究獲賊倭及辱邊將焚人家者盡寘於法以彰足下之威又令刷還三浦倭戶一依舊約以絕奸賊交惡兩間之患欲永世修好共享平安之福而足下得書以來未聞有

所舉行亦不通。答其由不知足下之意果何如哉。其以為尋常而不足聽歟。抑以通好我國為無所益而有忽易之心乎。足下苟不聽順在我自有處之之道。固無所損。虧在足下不遵先世輸誠款附之意。既致後日噬臍莫及之悔。則無乃失計乎。足下既不識附故在管下者亦不畏。或肆惡猶舊於前年十一月初二日。倭船一艘犯慶尚道界。劫掠加德島。伐討民人殺害九人。刃傷八人。又於今年

某月

二十一日倭船五艘犯全羅道界。劫掠濟州

供獻物。船殺害四人。刃傷十一人。尋為本道節度使。要擊賊。倭四艘逃。餘得去其一艘。為我所獲。斬十七人頭。以獻此西處作耗之賊。必皆貴嶋及三浦之人。其背國恩。蔑主威。以至克奸。一至此哉。我殿下臨撫一國。于今四載。綏遠字小仁。如天覆以貴嶋。自先世納忠。迄今不衰。深用嘉獎。但慮足下邈處荒遠。不能悉國家更新之化。且憫頑悍無知之徒。累違邦憲。恐終不能自保。故茲特遣禮賓寺正尹殷輔。前往貴嶋申諭國家綏撫有加之意。且

將_下搜獲前後犯罪作賊之倭置之於法事項及申
明舊約刷還三浦數外倭戶等并諭足下足下其
體國家禮遇隆重之意深思報效宜亟施行使奸
匪永絕交好益篤福流子孫世々無替豈不美哉
唯足下審諒敬賜物件詳具別幅餘冀若時珍重
不宣

和文

貴嶋我と好きを修むりの既久し我國に在る
遠人を如何なるの道を得貴島にたのむるは

大國小國をふるの福を受く頃年以來奸人の徒
漸く悪を肆よし丙寅年九月倭船一艘全羅
道乃界を犯し濟州乃船被掠免朝臣柳軒金
良輔を殺し是貴嶋の人よ非んハ必し三浦小
居泊者ありし三浦の倭人來り我土り居る
子孫を長し業を安んずるのたふしと百年其
漁釣採いしもの貿易被通しもの衣食被た
はし我り祖宗乃大恩不非れし事れし
然るも今恩被忘れ義の背記甲子年より以來

去りてに邊將を辱し民家を焚燒する所を
王者の仁を以てはしめても彼を遂に王法を犯さ
又許さばわさふに至るも曾て我祖宗乃朝ふ
在る三浦の居倭唯六十戸を約し其出入
來往皆是の界限あり今年代既久く其
其種類を多くはるに至りしに書城貴嶋に
通し其賊倭おほい邊將を辱かし久人家を焚く
ものを以てて是は法を置かざりて曰約の
數外の倭戸をあつた歸さしむ足下書を得る
より其のいふは是を施し行ふはかく又其
昔に答へは是尋常にして聞か足るは
抑好む我我國の通は益ありとあり
至は果して我の所を聞く事なくむ
我のありて又是の處は法の道有足下我國
順ふの誠ありて州人ふりてありて
このありて慎む所なり前年十一月二日倭船
一艘が徳島城掠め九人を害し八人城を傷今年
倭船五艘又全羅道を犯し四人を殺し十一人を

又傷以本道節度使是賊遮さる撃以四艘逃去。
その一艘賊提し一十七人賊斬り以て獻しりり
此西所乃賊ありし貴嶋ありし三浦ふ居はれ
なりゆし我々殿下位を受しり以來四歳あり
貴嶋乃久し忠をいしは賊嘉しゆ足下の遠
たふ居しり國家位を継ぐの事賊詳く為さる
あはれ思ひ且無智乃徒遂く王法を犯しゆ
ゆわさゆし至しむふとを憫きみ禮賓寺乃正
尹殷輔を以て專し貴嶋に往き此事を諭さし
足下宜し是を體し以て施行にゆし

此比金安國我州又答し書有約条の事と載
せり其書左に記し

答對馬島主書

承し書得審雅履和勝開慰書中所示亦已備悉國
家綏懷遠人仁如覆載送往迎來饋廩無闕接過
之典無不詳盡邊吏若不奉行往來之際廩給不
時以致阻滯困之則其罪固大即已具由轉啓推
鞠果如來書所云則當治慢法之罪足下其體國

家至意開諭遠通益厲誠款不勝幸甚但來書以
焚燒倭戶為熊川縣監之事邊吏縱頑豈能不畏
國憲而故令焚之乎專是浦居倭人自相失火後
因私憤擅越閘限焚我廬舍而欲免己罪修飾其
辭反歸咎邊吏以誑足下足下初既不能檢覈後
又傾信詐說無乃過乎設使邊吏無狀焚蕩其戶
彼當申訴于朝便治其罪豈可冒犯邦禁擅行報
復乎足下果能為國盡誠檢下以嚴則必不至此
且國家修其隣好為來久矣待之以誠而約之以
信彼此苟不以誠信相接則非初修好本意也某
等約船往來計皆六十餘歲初約之時其人年齒
必不下數十據今近百歲已皆死歿而代受圖書
者往來猶舊此豈誠信之道故令邊吏勿許接待
矣足下亦諒此意毋給文引以不負誠信之約餘
冀順序珍重不宣

和文

書中乃示以所_レ不_レ悉_レ也_レ我國遠人を待_レの
事至_レる_レ所_レ今邊吏料を給_レ乃時

あつてもと以て其往來の際是れ滞留窮乏の
いささしむと其示しにものく是れ啓聞し其事
を究めしむり果してつ所乃如くむしもの
其罪を考へて之れ但來書倭戸を焚く乃事
熊川縣監乃致に所とを非なり是れ
浦に居るの倭人之門を相失火し其後私憤
よひて擅り界限を越へての人家を焼き却り
罪をとり邊吏に歸し以て足下は誰のた乃
足下是れ治むる事なくかへて其妄説を信に
是れい邊吏に果して其倭戸を焚事阿く
其母と母彼宜く是れ朝廷より其罪を正
さし事は請ふる以て國禁を犯し界限を越へ
擅り其恨を報ふる也且某等圖書の事
其圖書を請り我國に來往するもの今既に六十
餘年より想ふに其初約は受し時大概幾十歳
たふる時今百歳に近かぬもの
人々も死亡もするもの來往する事猶舊なり
あつて誠信の道としめかへて邊吏に

